


『島根県内農具図解』解説本文篇(三)


三保忠夫

前稿(本誌、継続中)に続き、「解説本文」の翻字を行う。
 翻字凡例は右に同様である。

160	159	丁数
唐臼 十分ノ一	磨 十五分ノ一	標題
唐臼ハ、実籾ヲ挽キ、米トナスモノニテ、上口ヨリ籾ヲ投入シ、カセ木ヲ把テ回転スレハ、皮ヲ脱シテ米ト成ル。其製、木製・竹製ノ兩種アリテ、木製ハ数十年ヲ保チ、竹製ハ、凡籾百石内外ヲ挽キ終レハ、毀損シテ復タ用ヲナス。	磨中ニ米ヲ盛リ、挽キ、手ヲ以テ回転シ、籾ヲ破リテ米ヲ出ス器ナリ。	解説本文
那	ニタ	備考

165	164	163	162	161
漏斗 十分ノ一	全上 十分ノ一	全上 十分ノ一	籠臼	木磓
漏斗ハ、中ニ籾ヲ入レ、少許ツ、白	*	*	其類、數種アリ。竹籠ヲ外囲トシ、中ニ土ヲ充ツルモノアリ。桶ヲ外圍トナスモノアリ。或ハ、全ク木ヲ以テスルモノアリ。共ニ磓碾シテ、米ト穀皮ヲ分別スルニ用フ。	木ヲ以テ図ノ如ク作ル。其用、磓ニ異ナラス。当地方ニ於テ、専ラ之ヲ使用ス。
ヒノ	ヲキ	ヲキ	ヲキ	*(大原カ)

<p>168</p> <p>(籾)ルノ図 テ穀類ヲ籾 且ツ、箕ヲ以 田白ヲ挽キ、</p>	<p>167</p> <p>挽木[＊]十分ノ一</p>	<p>166</p> <p>木田白[＊]十分ノ一</p>	<p>一[＊]籾白[＊]十分ノ一</p>
<p>*</p>	<p>挽木ハ、縄ヲ(イ)ノ両端ニ着ケ、 梁木等ニ吊下シ、(ロ)ヲ碓耳ニ刺 シ、髻碾ス。</p>	<p>松ノ材ヲ以テ作り、樗、又、槐ヲ以 テ歯トシ、表面ヲ劈竹ヲ以テ組シ、 内ニ粘土ヲ実シ、之ニ齒ヲ指シ、固 定シ、縁座ハ桧ヲ曲ケ、土台ハ樗ヲ 以テス。箒ハ藁ニテ作り、中木・挽 木ハ杉材ヲ用ユ。稻扱ニカケタル粗 籾ヲ、凡(瓦)ソ巻斗式升位入レ、イ印 ノ左右ヲ兩人ニテ持チ、米ヲ挽分ク ル器械ナリ。</p>	<p>中へ壁[＊]落セシムル器ナリ。 籾白ハ、漏斗ヨリ籾ヲ墮[＊]落セシ メ、回施[＊]シテ、籾皮ヲ剝脱シ、精 米ニスル器ナリ。</p>
<p></p>	<p></p>	<p>知頭 八上</p>	<p></p>

<p>173*</p> <p>農夫、扇風ヲ 使用スルノ図</p>	<p>172</p> <p>扇風[＊]</p>	<p>171</p> <p>万斛[＊]十分ノ一</p>	<p>170</p> <p>万斛[＊]十分ノ一</p>	<p>169</p> <p>千斛[＊]十五分ノ一</p>
<p>*</p>	<p>碓ニテ磨キタル米穀ヲ盛り、風車ヲ 転シ、穀ト秕トヲ分離セシムル器ナ リ。</p>	<p>万斛ハ、米ト籾トヲ分離セシムル器 ニシテ、米・籾混淆ノモノヲ上口へ 入ルレハ、漸次ニ篩上ヲ徑[＊]過 シ、籾ヲ去ルナリ。</p>	<p>杉・松・栗等ノ材ヲ以テ如図作り、 銅線ノ網ヲ張り、米・籾混合セルモ ノヲ區別スル具ニシテ、髻ニテ磨シ タル後、其上口ヨリ移シ、銅線上ヲ 徑[＊]過セシメハ、則、米皮全ク分離 ス。</p>	<p>千斛ハ、米ヲ精撰シテ糠糲ヲ除ク器 ニシテ、其一番ニ米ヲ掛レハ、二番 ニ精米ヲ発シ、台箱ニ糠糲ヲ止ム。</p>
<p></p>	<p>ヒノ</p>	<p>那</p>	<p>岩井 法美 圓美</p>	<p>那</p>

178	177	176	175	174
俵 <small>い</small> 十五分ノ一 漏斗 <small>くろじよと</small> 全上	俵 <small>たわら</small>	蕈 <small>むしろ</small> 二十分ノ一	升 <small>ます</small>	斗箱 <small>とばこ</small>
俵ハ、藁ヲ以テ編製ス。穀物其他、物品ヲ容レ、運搬スル具ナリ。漏斗ハ、劈竹ヲ以テ製シ、俵ニ米ヲ	俵ハ、渾テ穀類ヲ納メ、保存、或ハ、運搬スル為メニ用フルモノニテ、従前、貢納米ノ制アリシトキ、各其領地ニ依リ、三斗・四斗・五斗入等ノ別アリシト雖モ、製方 <small>(法)</small> 、概シテ四ヶ所ヲ編ミタル薦 <small>こも</small> 二枚ヲ重ね、五ヶ所繩ニテ緊 <small>(緊)</small> 縛シ、四方ニ縦繩ヲ付ス。之ヲ精俵トス。	蕈ハ、藁繩ヲ堅筋トシ、打藁ヲ織リ製シタルモノニテ、穀物ヲ乾燥シ、或ハ、農家ノ席トナシ、其他、所用多シ。	斗量ヲ定ムル器ニシテ、麓 <small>(農)</small> 務上、必用ノ器ナリ。	斗箱ハ、穀物収獲 <small>(穫)</small> ノ節、其数量ノ多寡ヲ升ル器械ナリ。
ヒノ	那	那	嶋	那

184	183	182	181	180	179	
一 麥落 <small>あはぎおとし</small> 十五分ノ一	藁削 <small>わらちぎ</small> 十分ノ一	踏春 <small>ふみうす</small> 二十分ノ一	碓 <small>からうす</small>	吹 <small>かます</small> 十分ノ一	漏斗 <small>じょうと</small>	入ル、トキ用ユル具ナリ。
麥藁ヲ以テ器面ヲ撲チ、大・小麥ノ実ヲ落ス器ナリ。	竹、或ハ、鐵ヲ齒トナシ、松木ヲ台トナス。高一尺三寸、幅二尺。米苞 <small>こめつと</small> ニ用キル藁ノ塵ヲ去ルニ用キル具ナリ。	碓ニ米・麥・粟等ヲ盛り、人力ヲ以テ精白ナラシムルノ器ナリ。	碓ハ、米・麥ヲ搗キ、精白ナラシムル器械ナリ。	吹ハ、穀類ヲ入レ、保存シ、又ハ、田畑工 <small>(工)</small> 肥料ヲ運ヒ、其他、鐵・砂等ノ如キ細末ナルモノヲ駄荷 <small>だに</small> ニ作り、運搬スルニ用ユ。	竹ヲ以テ編ミ、穀類ヲ表 <small>(俵)</small> 等ニ納ル、ニ用ユ。	
ヒノ		ヒノ	岩 邑*	那		

189	188	187	186	185
横差 [*] 十分ノ一	連架 [*] 十分ノ一	連枷 [*] 十分ノ一	穂打 [*] 十分ノ一	麦叩 [*] 十五分ノ一
松材ニテ作ル。首長一尺、柄長四尺。籾 [*] 卸ニテ分ケタル塵芥 [*] 中ノ穀 [*] ヲ搥 [*] チ分ケ、或ハ、豆菽 [*] ノ莢 [*] ヲ搥 [*] 分ツニ用キル具ナリ。	麦・粟 [*] ・豆類 [*] 、其他 [*] 、実 [*] ヲ撲 [*] キ落スニ用ユル器ナリ。	多ク杉ノ自然材ヲ以テ製ス。舞木 [*] トモ云フ。元 [*] ヲ握リ、転回 [*] シテ、麦・豆類 [*] ヲ敲 [*] キ、皮 [*] ヲ分ク [*] ル器ナリ。	穂打 [*] ハ、方言 [*] ブリ。スデ。シモク。等。其形種々アリ。共ニ稻・麦・大・小豆 [*] 、蕎麦 [*] 、穀物 [*] 混納 [*] ノ節、穂 [*] ヲ打 [*] 落ス具ナリ。	麦叩 [*] ハ、麦ノ穂 [*] ヲ落 [*] ス具ニテ、台 [*] ヲ木ニテ製シ、小竹 [*] ヲ劈 [*] リ、間 [*] 一尺ヲ置キ、図ノ如ク作り、之ニ並立 [*] シ、麦ノ根株 [*] ヲ持チ、穂 [*] ヲ打ツコト三度ニ及ヘハ、粒々 [*] 皆脱 [*] 落ス。
	日ノ	八上 知頭	那	那

195	194	193	192	191	190
擲棒 [*] 全上 畔打 [*] 全上	玄翁 [*] 五分ノ一	全上 槌 [*] 十分ノ一 籾搔 [*]	長槌 [*] 十分ノ一	堀槌 [*]	椀 [*] 五分ノ一
擲棒 [*] ハ、麦、大・小豆 [*] 、蕎麦 [*] 等ノ子実 [*] ヲ落スニ用ユ。 畔打 [*] ハ、挿苗 [*] 前、田畔 [*] ヲ塗り、大・	玄翁 [*] ハ、石 [*] ヲ碎キ、或ハ、木石 [*] ヲ打込ムニ用ユ。	槌 [*] ハ、稻・麦ノ子実 [*] ヲ落ス器ナリ。 籾搔 [*] ハ、籾 [*] 穀 [*] 等ヲ搔 [*] キ集ムル具ナリ。	長槌 [*] ハ、樫、又ハ椿 [*] ヲ以テ槌トシ、柄 [*] ハ松・杉 [*] ヲ用ユ。犁返 [*] シタル土塊 [*] ヲ敲 [*] 碎スル器械 [*] ニシテ、山澗 [*] 村落 [*] ニハ通用 [*] スル便器 [*] ナリ。	杭 [*] ヲ打込ムニ用ヒ、或ハ、田圃 [*] ノ乾土 [*] ヲ推碎 [*] シ、或ハ、畦畔 [*] ヲ堅固 [*] ナラシムル等ノ事ニ用ユ。大小種々アリ。	儲 [*] 或、椀 [*] 材ニテ之ヲ為ル。首長八寸、柄長一尺。土俗 [*] 之ヲ藁 [*] 敲 [*] 、又、横槌 [*] ト云フ。乃チ、縄 [*] ニ用キル藁 [*] ヲ搥 [*] チ和 [*] クル器ナリ。
	ヒノ	ヒノ	八上 知頭	タカ [*]	□ [*]

202	201*	200	199	198	197	196	
塵扇 十五分ノ一	田家、稻扱ヲ 使用スルノ図	一 稻扱枴 三十分ノ	稻扱 十分ノ一	搗臼 十分ノ一	杵 十分ノ一	横槌 全上 大打槌 七分ノ一 小打槌 全上	小豆ヲ播種スルニ用ユ。
塵扇ハ、穀物ニ混スル塵埃ヲ扇キ除		松木ヲ以テ作り、周囲ニ六個ノ鉄牙 ヲ釘着シ、枴枴ト稻扱トヲ兼用ス。	稻扱ハ、稻茎ヲ列齒ノ間ニ挟入シ、 一挽、穂ヲ脱落スルノ器具ナリ。	松材ヲ以テ作ル。高一尺七寸、口径 一尺七寸。麦、或ハ、粟等ヲ搗ク器 ナリ。	桜、或ハ、椿材ヲ以テ作ル。高一尺 八寸、柄二尺三寸。麦、或ハ、粟等 ヲ臼ニ入レテ搗(搗)ク器ナリ。	横槌、及小槌ハ、稻藁等ヲ打和ス ルニ用ヒ、大打槌ハ、田畑損所 脩 繕スル時、杭ヲ打込ムニ用ユ。	
	□*	日*	那	楯縫*	楯縫	出雲	

207	206	205	204	203	
一 粗眼篩 全上	楕 十分ノ一	木ノ実筵 十分ノ一	木ノ実筵	団扇	クニ用ユ。
粗篩ニ掛テ后、小砂、或ハ、小米等 用ユ。	浅キ筵ニ似テ、三辺ニ椽アリ。他ノ 一辺ハ缺ク。底ニ網状ノ鋸痕アリ テ、微ク凸状也。コノ内ニ、米・粃 ノ混シタルモノヲ盛り、上下ニ揺動 スレハ、米粒ハ底面ニ停留シ、粃 等ハ無椽ノ一辺ヨリ翻散スルナリ。	長方形ニ作り、底面ハ劈竹ヲ以テ縦 横ニ編ミ、四隅ニ繩緒ヲ付シタル者 ニシテ、使用法ハ前ニ異ナラス。	図ノ如ク、長方形ニ作り、一方ヲ柄 ニシ、底面ニ劈竹ヲ併列ス。両柄ヲ 把リ、木ノ実ト皮穀(巻)等ヲ分クル器 ナリ。	穀物ノ内ニ混シタル塵芥ヲ扇除スル 具ナリ。	
気多		カンド	カンド	カンド	飯*

213	212	211	210	209	208	
板箕 八分ノ一	板箕 七分ノ一	籾篩 二十分ノ一	角篩 二十分ノ一 藁箒	籾篩 七分ノ一 籾篩 七分ノ一 (ママ)	米篩 五分ノ一	ヲ分別スルニ用ユ。
杉・桧等ニテ造ル。用方全上。	松・桧 [*] ニテ作り、穀物ヲ取扱 ^{とりあつかう} ニ要ス。	稲扱ヲ以テ籾ヲ扱落シ、籾ト実トヲ分別スルニ用ユ。	藁箒ハ内庭ヲ掃除シ、或ハ、収獲 ^(穫) ノ際、穀 ^(穀) 物ヲ掃キ集メル等ニ用ユ。	籾篩ハ、米・麦ノ穀ト実トヲ分離 ^(離) スル具ナリ。其製作、竹トツヅラ ^(言) ノ両品アリ。其ツ、ラ製ノモノヲ最モ良トス。	米篩ハ、米ト籾トヲ分離 ^(離) スル具ナリ。其製方ハ、輪廓ヲツ、ラ ^(言) ニテ造リ、麻糸ヲ以テ網ヲ製シタルモノナリ。	
		氣 [*] □	ヒノ			

219	218	217	216	215	214
負籠	負籠	藁敲 三分ノ一	磨 十分ノ一	筒器	箕 八分ノ一
牛馬ノ食草、又ハ、糞・汚穢物・草等ヲ負ヒ運フノ器ニシテ、細小ノ木枝ヲ以テ骨トシ、細繩ヲ以テ編ミ、開閉ヲ自在ニス。	劈竹ト稿ヲ以テ、図ノ如ク製シ、厩肥、或ハ、塵芥ヲ入レ、田圃ニ運搬スルニ用ユ。	台ハ石ニテ作り、槌ハ木ニテ作ル。共ニ藁ヲ打ツニ用ユ。	磨ハ、御影石ヲ以テ、直径 ^(徑) 一尺二寸、高サ一尺五寸ニ作り、雑穀 ^(穀) ヲ盛リ、回旋シテ末トナス器ナリ。	筒器ハ、厩肥、或ハ、土肥等ヲ入レ、田畑へ散布スルニ用 ^{もちゆ} 。	籾ヲ劈リテ経トシ、劈竹ヲ以テ緯トシ、組織シタル者ニシテ、穀 ^(穀カ) ニ混シタル塵埃ヲ去ル具ナリ。
	仁 [*] □	汗入 八橋	ヒノ	ヒノ	ヒノ

226	225	224	223	222	221	220
擔子 [＊] 十分ノ一	目籠 [＊] 十分ノ一	ソラ口 [＊] 十分ノ一	腰廚 [＊] 五分ノ一	荷俵 [＊] 十歩(分)ノ一	ツカリ [＊] 方言 十分ノ一	負籠 [＊] 十分ノ一
擔子ハ、松材ヲ以テ、(イ)二尺五寸、(ロ)一尺二寸、(ハ)六寸五分ニ造リ、	目籠ハ、劈竹ヲ以テ編ミタルモノニシテ、刈草等ヲ入レ、運搬スル具ナリ。	ソラ口、方言チサノ木ヲ屈撓シ、蔓ヲ以テ外圍ヲ組ム。肥料ヲ山田エ運搬スルニ用ユル具ナリ。	腰廚ハ、農夫ノ田野ニ出ルトキ、行廚等ヲ入レ、腰ニ帶フル具ナリ。	荷俵ハ、灰ニ糞ヲ和シ、日ニ乾カシ、或ハ、蕎麥、大・小麦ノ種子ヲ灰ニ和シテ遠キニ運フニ用ユ。	藁繩ヲ以テ編ミ、其形、平扁ニス。落葉等ヲ入レ、負擔スル具ナリ。	竹ヲ以テ編ミ、二條ノ紐ヲ設ケ、物ヲ負ヒ運フ具ナリ。
鹿足				□ [＊]	□ [＊]	神門

230	229	228	227
荷台 [＊] 六分ノ一	負籠 [＊] 十分ノ一	松葉搔 [＊] 負籠 [＊]	負籠 [＊]
荷台ハ、刈タル稻・麦、又ハ、薪ヲ運搬スルトキ、其荷物ヲ乗セ、後口ヨリ前ニ向ケ締リ、繩ヲ取り、背負フニ用ユ。	小木ヲ曲ケ、図ノ如ク、繩、或ハ、藤蔓ヲ以テ纏ヒ、蔬菜、或ハ、肥料、其(他脱カ)、雑物ヲ運搬スルニ用ユ。	竹ニテ作り、搔手ハ割竹ヲ曲ケ、葛ニテ束ネ、柄ハ丸竹ヲ以ユ。枯葉・乾草ヲ搔集スル至便ノ一器ナリ。負籠、俗ニソラクチ。チヤノ木・方言、数本ヲ撓曲シ、小繩ニテ撚ミタルモノニシテ、負繩、并ニ、脊当ハ藁ニテ作ル。穀・菜、其他、堆・糞ヲ入レ、山澗・谿路ヲ運搬スル便器ナリ。	細キ丸木ヲ屈撓シ、繩ヲ以テ編綴シタルモノナリ。壤土・壤草等ヲ納レ、運搬スル具ナリ。
冊 [＊]	ヒノ		ノキ

236	235	234	233	232	231
ロクダイ方言	薹馬 <small>たごうば</small> 十分ノ一	負子 <small>おしこ</small> 五分ノ一	擔 <small>た</small> 結 <small>むす</small> 十分ノ一	脊 <small>いせな</small> 當 <small>あて</small> 十分ノ一 脊 <small>ろ</small> 當 <small>あて</small> 全上	セナカチ <small>セナカチ</small> 五分ノ一
劈竹ヲ曲ケ、鈍角形ニ作り、麻繩・	藁ニテ之ヲ作ル。長一尺五寸、口径一尺二寸。牛馬ノ背ニ附ケテ、砂土ヲ運搬スルナリ。土俗之ヲ袴樽ト云フ。	藁ニテ組ミ、脇 <small>わき</small> 当 <small>あた</small> り斜 <small>ななめ</small> ニ組ミ、脊廻 <small>せまわ</small> リハ繩ニ索 <small>な</small> フ。襟 <small>えり</small> 当 <small>あた</small> り細キ丸木ヲ以テ、両端ヲ小繩ニテ結 <small>むす</small> ヒ留 <small>とど</small> ルナリ。小柴・秫 <small>まじ</small> 等 <small>ら</small> ヲ脊負 <small>せふ</small> フ時、図ノ如ク襟 <small>えり</small> 木ニ結 <small>むす</small> ヒテ両脇ニ通シ、脊負 <small>せふ</small> フナリ。	作物ヲ収納スルトキ、背 <small>せま</small> 擔 <small>た</small> ヒ運 <small>は</small> フモノニシテ、両端ヲへ字形ノ木ニ結 <small>むす</small> ヒ、荷物ヲ負擔スルニ用ユ。	脊 <small>いせな</small> 當 <small>あて</small> ハ、共ニ藁ヲ以テ製シ、總 <small>すべ</small> テ貨物 <small>もつ</small> ヲ脊負 <small>せふ</small> ヒ、運搬スルニ用ユ。	藁・粗苧 <small>あらま</small> ヲ以テ造リ、左右ノ緒 <small>お</small> ヲ両肩ニ懸ケ、草木、其他、諸荷物ヲ脊負 <small>せふ</small> フニ用ユ。
□*	出雲	八上 知頭	那		仁多

241	240	239	238	237	
荷 <small>に</small> 箱 <small>はこ</small>	綿 <small>わた</small> 籠 <small>かご</small>	草刈籠 <small>くさ</small> 全上	苗 <small>な</small> 簀 <small>え</small> 十分ノ一	苗 <small>な</small> 籠 <small>かご</small> 十分ノ一	十分ノ一
土砂、又ハ、肥料等ヲ運搬スルニ用ユ。	劈竹ヲ以テ、如图、製作シ、綿 <small>わた</small> ヲ運 <small>は</small> フ。	竹 <small>い</small> ニテ作ル。口径一尺四寸。田畠ノ地上 <small>じ</small> ケ・地下 <small>じ</small> ケ等ニ砂土ヲ盛リテ荷 <small>か</small> 擔 <small>た</small> シ、其他、種々ノ物品ヲ盛リテ運搬スルナリ。竹 <small>ち</small> ニテ作ル。口径一尺四寸。刈草、或ハ、秧 <small>え</small> 等 <small>ら</small> ヲ盛リテ運搬スルナリ。	竹 <small>ち</small> ニテ作ル。苗 <small>な</small> ヲ盛テ運搬スル具ナリ。	竹 <small>ち</small> ヲ以テ疎眼 <small>そ</small> ニ造ル。口端 <small>くち</small> ニ二條ノ繩 <small>な</small> 緒 <small>お</small> ヲ着ク。用法ハ、苗代 <small>な</small> 田 <small>だ</small> ヨリ取リ上 <small>あ</small> ケタル稲苗 <small>い</small> ヲ積 <small>つ</small> 荷 <small>か</small> ヲ運搬スルニ用フ。	藁繩 <small>わら</small> ヲ緒 <small>お</small> トナス。米・草・苞 <small>か</small> 、或ハ、薪・材 <small>ま</small> ヲ擔 <small>た</small> ヒ運 <small>は</small> フニ用フ。
仁	会*	出雲	□*	法	

<p>246</p> <p>イヌとう 掃<small>イヌ</small>十分ノ一 畚<small>イヌ</small>全上</p>	<p>245</p> <p>かるこ 輕籠<small>かるこ</small>十分ノ一</p>	<p>244</p> <p>＊もつこ 持籠<small>もつこ</small>十分ノ一</p>	<p>243</p> <p>挿<small>さ</small>子<small>す</small>十分ノ一</p>	<p>242</p> <p>なまかご 苗籠<small>なまかご</small>十分ノ一</p>
<p>掃ハ、棕、又ハ、朴ニテ作ル。中央 楕円形、両端円形ニシテ、畚ノ類ヲ 擔フニ用フ。 畚、藁ニテ組織ス。提結、伸縮スル ヲ得アリ。土砂、其他ノ物品ヲ運搬 スル器ナリ。</p>	<p>竹輪ト小繩ヲ以テ組タルモノナリ。 稲苗ヲ運搬スル要器ナリ。</p>	<p>小繩ニテ組ミタルモノナリ。土砂、 又ハ、伐木、其他、運搬ノ器ナリ。</p>	<p>棕、或ハ、朴ヲ以テ作り、柴・薪・ 稜、或ハ、稻、其他ヲ束ネタルニ両 端ヲ指シ通シ、繩ニテ結留シテ、擔 クナリ。 藁ニテ索ヒ、挿子ニ附属ス。二筋ニ シテ、各丈六尺ナリ。</p>	<p>苗代ヨリ苗ヲ拔キ束ネ、植付ノ場所 へ運フニ用ユ。</p>
<p>知頭 八上</p>	<p>知頭 八上</p>	<p>知頭 八上</p>	<p>＊ □</p>	

<p>250</p> <p>提<small>も</small>畚<small>もつこ</small>十分ノ一</p>	<p>249</p> <p>提<small>も</small>畚<small>もつこ</small>十分ノ一</p>	<p>248*</p> <p>全上</p>	<p>247</p> <p>＊ フゴ<small>フゴ</small>方十分ノ一</p>
<p>竹ニテ編ム。使用ハ、全上。</p>	<p>提畚ハ、繩ヲ編ミテ作り、両側ニ円 竹ヲ付シ、枯草、或ハ、厩肥等ヲ二 人運搬スル具ナリ。</p>	<p>フゴハ、土砂、其他、蔬菜・厩肥・ 塵芥等ヲ入レ、擔キ運搬スルニ用フ。</p>	<p>＊</p>
<p>ヒノ</p>	<p>ヒ □</p>	<p>ヒノ</p>	

注

159 「磨」は、粃を擦つて皮(殻)を除き取る白。
袖下隅のニケ字は、右三分の一ほど截断されている。
「米ヲ」は、「粃ヲ」とありたい。

160 「唐臼」は、『兵庫農具図解』巻一に「とうす」とみえる。
「カセ木」は、上臼の側部の耳木(榎耳)の穴に突き立て、白を
回すための長いL字状の木製アーム(腕木)。
「把テ」とは、カセ木の手もとをにぎって、の意。カセ木の手も
とは、天井から釣られていて、かつ、T字型、あるいは、二股に
作られていて、二人がかりで作業に従事する。
「復タ用ヲナス」とあるが、「……ナサズ」とありたい。「サ」字
を脱したものであろうか。

161 袖下隅に漢字二ケ字があるようだが、截断のため、未詳。あるいは、「大原」か。存疑。

162 「外囲」は、そとまわり。割竹で籠のように編んで囲い包む。

「土ヲ……」は、赤土に苦塩を混ぜて叩き締める。

「礮碾」の「礮」は、すりうす、また、すりみがくこと。「碾」は、ひきうす、うす、また、ひいて粉にすること。

「皮」字は重書。

163 丁ウは、空白。

164 丁ウは、空白。

165 「漏斗」は、先に「上漏」(147)ともみえる。但し、ここは天井から釣り下げられていて、扱は下の扱白へ適量ずつ落ちていくように調節されている。参照、178。

「墮落」は、扱が上の漏斗から下の扱白へ落ちること。

「精米」は、この場合、玄米のことらしい。

166 「木田白」は、木製の田白。168にその使用図がある。

「組」の「ニ」字の第二画と「内」字の右上部とは、文字を擦り消した上に位置する。「ニ」は「ミ」とありたい。

「内」の「ニ」は補入。

「実シ」は、「みたす(充)」の宛字であろうか。

167 この「挽木」は、165、166などの図の中にもみられる挽木の一種である。159から164の白類でも使用されたであろう。但し、この「解説本文」の中には、「イ」「ロ」とあるが、図の中には「イ」「ロ」の注記はない(166図には「ロ」の注記がない)。

「磗耳」は、上白を回旋させるため、そのふちに取り付けた耳殼

様の突起(耳木)。参照、160(カセ木)。

袖下隅にわずかの墨筆片を留める(一字分)。截断にて判読不能。

168 166図のような田白の使用図である。

「箕」は既出。参照、141。

「簸」は、箕で穀物をあおりあげ、微風を利用して糠やごみを除き去ること。

168 丁ウは、空白。

169 「米ヲ」の「ヲ」は、文字の抹消部に位置する。

「糠糲」は、ぬかや砕かれた屑米。

「番」字は、文字の抹消部に書く。

「発シ」は、選り分けた米を二番の口から飛び出させる、の意。

「止ム」は、屑米やぬかが網目を抜けて下に落ち留まること。

170 「萬斛籠」は、『兵庫農具図解』巻一に「まんごくとおし」とみえる。「籠」は、もと、竹で編んだ丈の高いはこ、の意。

「磨シタル後」とは、臼で扱すりした後、すった後、の意。

「米皮」は、玄米と扱とをいう。

171 「漸次ニ」は、だんだんに(下行していく)、の意。

172 「扇鳳」の読み方未詳。いわゆる、とうみ(唐箕)、颯扇。扇車によって扇風をおこし、重い精粒、軽い屑粒、および、藁屑・塵などを分別する。「とうみ」(兵庫農具図解、巻一)。

「糝」は、かす米、また、しいな。参照、149(糝)。

173 172図の用具の使用図である。

袖下隅に文字の一部を残す。未詳。「ヒ」でも「ノ」でもない。あるいは、「全」字の第一画と第三画との左端か。参照、201)

173 丁ウは、空白。

174 「斗箱」は、一升枧。枧には、枧掻き棒（斗掻き、斗棒、ますかけ）をあわせ用いる。参照、175。

「升」は、文意から推して試読した。計量する意。

175 「斗量」は、ます（升）ではかるものの容量。ますめ。

「釐」字は「農」の俗字。参照、87。

177 「納」字は「米」字を擦り消した上に書く。

「緊縛」は、固くしばること。

178 「漏斗」は、俵たわらじょうご、竹じょうご、糲じょうご、米じょうごの類をいう。玄米や糲などを俵や吠たわらにつめる時に用いる。『物類

称呼』に、「漏斗じやうご酒を器にうつす具なり」○（中略）別別に米穀を俵にに「（四、一一ウ）とみえる。劈竹で編製したものは米の走りが良い。参照、165、また、147。

180 「吠」、参照、158。

181 「碓」は、踏臼、唐臼からうす。182に同様、足で踏んで玄米を精白するが、石臼が土中に埋められている（地唐臼）点点が、182と異なる。

臼の中にわ（搗き輪、かちわとも）を用いることがある。

袖下隅は、「邑」「岩」「二ケ字が併記されている。「法」字不見。

183 「藁削」は、わらすぐりのこと。「わらそげ」との呼称（読み方は、斐川町中央公民館郷土資料室民具收藏室「民具資料收藏台帳」

（第六巻、八五二）による。

「塵」は、藁の根茎部についている鞘葉（はかま）をいう。

184 「麦落」は、麦叩き（参照、185）、麦落し台（木次町）、麦打ち台、むぎかち（兵庫県農具図解）などとも称される。

185 「劈り」は、竹をさき割る意、たち割ること。

「穂ヲ……」、麦は稲にくらべて脱粒性が大きく、穂首から容易に折れ、落ちやすい。

186 「方言ブリ。スデ。シモク。等」の「」。印三ヶ所は原文のまま。広島県安芸郡、山口県阿武郡・豊浦郡、また、長崎、熊本などの一部でも、連枷（参照、187・188等）の古風なものをブリという。このブリ系は、中国西部、九州北部などに分布し、今の那賀郡のブリも、これに一連のものである。スデ、シモクは、その少数異形であろうか。シモクは、その形体が撞木、あるいは、撞木杖ええに似ているところからの称であろう。スデは、益田市にみられる。なお、連枷の使用、呼称分布、その歴史などについては、常民文化研究所編「脱穀具のまとめ」（『民具マンスリー』、第七巻、第一一〇号、一九八〇年）、畠山豊「連枷覚書」（『民具マンスリー』、第一八巻、第一〇号、一九八六年）、『技術と民俗』、下巻（一九八六年七月、小学館、八二〜八四頁）、大館勝治「いわゆるクルリボウについて」（『埼玉県歴史資料館研究紀要』、第八号、一九八六年）、など参照のこと。

187 「連枷」は、唐竿からざ、また、くるい棒ぼう、ふり棒、回めぐい棒と称される類をいう。参照、186。「解説本文」にあるように、握部にぎぶを持って打部うてぶを後方から前方へ振りながら回転させ、穀類に打ちつける。

「舞木」との呼称につき、「京にて。まひぎねと云」（物類称呼、四、一ウ）、また、まえざお、まんぶり（東條操著『分類方言辞典』、東京堂出版、四一八頁）などが参照される。

「敲キ」は、むち打つように叩く、あるいは、横さまに打つこと。

- 188 「連架」は、187に同じ。
- 袖下隅「日ノ」の「日」字は、あるいは、重書か。
- 189 「横差」^{よこさ}は、山口県豊浦郡の方言にあるようだから、ここも那賀郡あたりの農具であろうか。
- 「穀」は、あるいは、「穀」とあるべきか。
- 「搦チ」は、打ち割ること。もとは、手や鞭で打つこと。
- 190 「揆」は、チン、ヂンと音読みさせるつもりであろうか。柄の短い木製の横槌、または、槌の横木をいう。
- 「横槌」は、よころずち(鹿足郡)、よころ(石見部)、よころち(隠岐島)などと称している。
- 袖下隅に墨筆文字あり。先の74の場合と類似して「114」のような字画にみえるが、判読できない。
- 191 袖下隅の「タカ」の三面目は截断されていて不詳だが、片仮名「ク」の頭部かもしれない。
- 192 「犁返……」は、すき起し、荒起し^{あらく}、のこと。
- 「敲碎」は、叩き砕くこと。
- 「テ」は、小さく補入。
- 「山潤村落」は、谷川・山あいの村・集落。
- 「通用」は、広く流通して用いられること。
- 193 「糶穀」^{もちあ}は、あるいは、「糶穀」とあるべきか。
- 194 「玄翁」は、石を割る大かなづち。殺生石を裂き割ったという玄翁法師の故事に出る。
- 196 「打和」は、叩いてやわらかくすること。
- 198 袖下隅の「楯縫」の二ケ字は、右端截断。この二ケ字の右方に
- も文字が存した可能性はある。
- 200 「鉄牙」につき、図によると、大釘を列植したもの(鉄牙)が六ヶ所に固定されている。
- 袖下隅「日」字は、もと「ヒ」と書いた上に重書か。
- なお、オモテの図中の寸法の内、「三」「長六尺」は青色後筆。
- 201 199の農具の使用図である。
- 袖下隅に一字あり。先の173と同様の形体らしいが、截断にて未詳。
- 201 丁ウは、空白。
- 202 「塵扇」の読み方未詳。風運のための用具。
- 203 「ニ」は、補入字らしい。
- 袖下隅「飯」字、右・下端は截断されている。
- 205 「繩緒」は、なわやひもの類をいう。
- 206 「櫛」は、木偏となつてはいるが、手偏とみなすべきか。「淘板」^{ちりいた}(農具便利論、中、三三才)、ゆるり(青森県)、ゆるげ(米沢)(大塚民俗学会『日本民俗事典』、昭和四七年、弘文堂、七七三頁)、また、ゆりわ(宮永正運著『日本農書全集6、私家農業談(越中)』、昭和五四年、農山漁村文化協会、三三三頁)、ゆりおけ(福島県会津地方)の類をいう。
- 「底二」の「二」は、二、三字を抹消した上に書く。
- 「鋸痕」は、その底板に、鋸で網目状に浅い溝を掘り付けておくことをいう。「微ク凸状也」に作る点とともに、工夫の加えられているところである。
- 207 「ツ」は、「」に重書か。
- 「颯扇」^{ちやうふ}は、唐箕(既出『日本農書全集6、私家農業談(越中)』、

- 二五四頁)。既出の「屢胤」(172)、「万斛簾」(170)など参照。
 「或ハ」の二字は、二ケ字ほどの抹消部の上に書く。
- 208 「小米」は、米の砕けたもの。粉末とも。
 「ツ、ラ(方)」は、葛籐ツツメヒの類。
 なお、おろし(とおし)の内、舂おろし、米のおろし、そのものなどを「つづら」ともいう(大庭良美著『津和野の民俗資料』、津和野町教育委員会、平成元年、七三・七四頁)。
- 209 「ツ、ラ(方)」、同右。
- 211 「実」字は抹消部の上に書く。
 袖下隅の「気」字の下方に墨筆片あり。「多」字の一端か。
- 212 「櫛」、未詳。参照、41。
- 214 「経」は、(もと、織り物の)縦糸、またそれに相当するもの。
 「緯」は、横糸、また、それに相当するもの。この字、重書。
- 215 「厩肥」は、家畜の糞尿と敷きわら・草などを混ぜ合せ、腐らせた有機質肥料。うまやごえ。
- 216 「御影石」は、花崗岩の別名。六甲山から切り出し、御影(神戸市)で加工したところからの称。
 「末」は、こな、粉末。
- 217 袖下隅の文字の内、「汗入」の右端は截断されている。
- 218 袖下隅に小さく「イ」とみえる。右半分が截断されたようであるいは、もと、「仁」と記されていたのかもしれない。
- 219 「壤草」は、培養土の類をいうか。
 「開閉……」とは、その中に容れる物のある、なしにより、開いたり畳んだりすることができることをいう。
- 220 「負籃」は、「負籠」(218、219)に同様、「おいこ」と読むこともできる。今、「おいこ」と読む。
 「二條」は、二本、の意。「條」は、細長い物を数える助数詞。
- 221 「ツカリ」は、背負い袋の一種(石塚尊俊編『出雲隠岐の民具』、考古民俗叢書(9)、昭和四六年、慶友社、一三四頁)。隠岐島一円にはよく使われていたが、出雲部の島根半島、仁多・飯石の山間部にも、まま残っていたとされる。
 「負擔」は、かつぎ、背負うこと。
- 222 袖下隅に二文字あるようだが、右側大半は截断されている。あるいは、「カン」(ド)字か「オキ」字かの左端であろうか。
 「十歩(分)」は、「十分一」の誤字らしい。
- 223 袖下隅に一文字分の墨筆片あり。不詳。
 「腰厨」は、小さ目の收穫物、弁当、小道具などを入れて腰にさげる小籠。「厨」は、食物、料理の意であるから、飲食物を携帯するための用具であろう。
- 224 「行厨」は、弁当、わりご(破子)、簞食、の意。
 「方言チサノ木ヲ屈撓シ」は、別に、「方言チヤノ木ノ曲ケタルモノヲ」(129、知頭・八上)、「チヤノ木・方言、数本ヲ撓曲シ」(228、使用地未詳)ともみえる。また、「穴突ハ、図ノ如ク木ヲ曲ケ」(77、使用地未詳)とする「穴突」の材などにもチシャノ木が選ばれる。これは、ムラサキ科の落葉高木のチシャノキ(高苔木)ではなく、エゴノキ科の落葉小高木・高木のエゴノキのことである(異名)。こうした曲げ材にチシャノキが用いられるのは、その樹質が均等化して硬いこと、樹皮が薄く、すべすべして

握っても軟かく感ずること、芯の部分に穴がなく、さし込みやすいこと、先端部が使用に耐えて逆立ちにくいこと、などの理由による(『日本民俗文化大系』、第一四巻、昭和六十一年、小学館、一〇頁)。

226 「ノ」字は、片仮名二字分ほど抹消した上に書く。

226 「擔子」は、「おいこ」「にないこ」のいずれを表記したものか、はつきりしない。

228 「チケヤノ木・方言」は、既出(224)。

229 「其」の下に「他」字を脱したらしい。

230 「荷台」は、いわゆる梯子型のおいこ、木負いこの類をいうようだが、方言名は別にある。

「苧」字は、抹消字の上に書く。

袖下隅の「那」字は、截断されて左半分しか残っていない。

231 「セナカチ」は、出雲山間部におけるおいこの一種(『出雲隠岐の民具』、既出、一三一〜一三二頁、勝部正郊氏執筆)。

「粗苧」は、むいて乾かした麻皮。これから作る未精製の麻糸もあらそという。「苧」は、からむし、真麻をいい、麻をそという。

233 「擔緒」は、「にないお」「おいお」、あるいは、音読などのいずれに読むべきか、未詳。いわゆる「連尺」をさすものである。

『出雲隠岐の民具』(同右、勝部氏執筆)に言及され、頓原町のそれが図版で紹介されている。

「背擔」は、「せなう」「せおう」のいずれか未詳だが、仮に、前者で読む。

234 「負子」は、連尺の類をいう(参照、233)。

235 「薙」は、除草の意。「薙馬」は、農夫が田畑で用いる草取り用の農具をいう(農政全書、薙馬図説)。当面の農具は、それを運搬具として転用したもので、形体・用途も、それに応じて変化したものらしい。

236 「苞」は、わらなどで苞んだもの。あらまき。

袖下隅に、少なくとも二字くらいの文字があるようだが、判読できない。あるいは、「法」と「邑」とを併記するものか。

237 「疎眼」は、編み目の粗いこと。

238 「苗簀」の「簀」は、あじか、土籠、かご、もっこ、の類。

袖下隅に墨筆片あり。未詳。

240 「ニ」字は、字間に補入する。

袖下隅に「会」字の正字体の左半分をとどめる。

241 「荷箱」は、肩で荷をになうためのざるかご。「箱」は、「筥」などと同義で、飯帚、飯筥、箸筒(筥)などを意味する。

中国地方では、こうした竹籠やざるをそうきという。「筥器」に出たものである。参照、140。

243 「結留シテ」の「シテ」は合字で、片仮名の「メ」の字体に似る。ゆいとどめる、意。

袖下隅に、二字分ほどの墨筆片をとどめる。判読できない。

244 「持籠」は、「もっこ」の宛字とみられる。とつとも、もっこ(番)は本来、「持ち籠」の音便形に出たものである。

246 「櫛」は、になう、かつぐ、意。あるいは、「掃」にも作る。今は、枋、即ち、物をになうための担い棒、てんびん棒をさす。方言語形は、広戸惇著『中国地方五県言語地図』(昭和四〇年、風間

書房、五〇二〜五〇七頁）参照。

「畚」は、もっこ、ふご、あじか、その他の読み方があるか。

247 「フゴ」は、もっこの類をいう。鳥取、兵庫、三重、和歌山、

福岡、東北などの方言にみえる（平山輝男、他編著『現代日本語
方言大辞典6』、平成五年、明治書院、五〇八三頁）。

袖下隅に文言はない。切除されたためか。但し、次の248には「全
上」（フゴ）とあり、袖下隅に「ヒノ」とある。247も同様、その使
用地は日野郡（鳥取県西部）であろう。

248 248丁ウは、空白。

249 「提^{てきり}畚^{もっこ}」は、今、試読する。「てさけもっこ」（福島）、「てもっ
こ」（八戸、会津）、あるいは、「ふたりもっこ」（秋田）、「かずく
もっこ」（福島）といった方言形が参照される（右『現代日本語方
言大辞典』）。

